資 料

# 各委員から事前にいただいたご意見等

「子育てに対する地域・職場の理解促進」について、それぞれの立場で思うことや、課題に感じていることなどについて頂いたご意見や各団体等での独自の取組みなどをまとめたものです

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| 阿部委員<br>（日出町社会福祉協議会） | 【地域に対して発達障がい児の理解促進】<br>・内容…発達障がい児向けの職業体験型イベントの実施<br>・協力者…SV、ペアレントメンター、企業団体 11 社<br>・効果…地域の専門家を活用し、地域の協力企業団体に発達障がい児の特性等を理解してもらう機会となる<br><br>【ファミサポ、ホームスタート】<br>・課題…コロナ禍での人材確保<br><br>【地域の子育て情報の発信】<br>・内容…子育て中のママが主体的に、子育てに役立つ地域の公園やお店のマップを作成<br>・効果…地域や人と繋がる、子育て中の親の社会参画の場、町への要望 |
| 岡田委員<br>（大分大学教授） | 「子育てが地域の人に支えられていると感じる」と回答するかどうかは、主観的な感触を回答してもらう設問になっている。したがって、①子育ての中で地域の人と関わりを持つ機会の量とその際の関わりの質、が基盤になっているもののそれに加えて、②子育ての中で地域の人に支えられているという事実の情報発信の状況や子育て仲間や家族でのそのような情報の共有状況、が影響を与えると考えられる。そこで、子育てが個人化し地域の人と関わる機会が全体的に減少しているという現状を踏まえ、<br>a. 子育ての中で地域の人に関わり支援してもらう機会や場またそこでの支援の質を高める研修など地域による子育て支援の機会充実を図る（子育てイベントでの地域の人との交流、子育て中の人と支援してもいい地域の人・組織とのマッチング機能強化、等）ことと、<br>b. 子育てを孤立して行わず、イベントやプログラムであるいは日常的に近隣の地域の人と交流し支援してもらいながら子育てを行うメリットについての情報発信（HP やテレビ番組などに加え、SNS など若い層の人々の利用する手段に寄り添って）、<br>に取り組む必要がある。<br>また、子育てにおいて地域の人に関わる機会が少ない背景としては、子育て支援に関する地域との連携などが進んでいない企業等職場の状況も大きく影響していると考えられる。子育て中の人が子育ての中で生じる困り（子どもの |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | 病気や怪我、子どもの保育・生活の場の確保とその質の向上、など）を職場に持ち込み支援を受けることがより容易に気軽にできるよう労働環境を改善する取組も重要である。このような点についての企業への働きかけを、企業にもメリットがあるような形で可視化する取組も重要である（おおいた子育て応援団「しごと子育てサポート企業」、「くるみんマーク認定企業」など）。 |
| 加藤委員<br>（大分県公認心理師協会） | 子育て世代を対象にした子育て支援の取り組みについて、きめ細かなサービスが提供されていることを拝見しています。課題の一つに、必要な人への必要な情報がどのように届けられるかということがあると思います。<br>情報周知の仕方と情報の使い方の提供について、現状を伺い、協会としても協力できればと考えます。 |
| 川野委員<br>（大分県商工会議所連合会） | 待機児童<br>4月生まれの子どもは1歳の育休明けに保育園に入園できます。しかしながら同じ学年でも生まれ月によっては1歳で育休が明けても既に定員に達しており、同じ学年の子どもが転園するなど空きが出るか、次の4月になるまで入園が出来ずにいます。出産の時期に関わらず母親の職場復帰に合わせて、いつでも受け入れてもらえるようにお願いします。<br><br>児童育成クラブ<br>受入時間8:30～17:30（土曜休み）では働く女性の勤務時間に対応しておらず、女性の社会参画の足枷となっています。通勤時間等を考えるとフルタイムで働くことは不可能であり、子どもの受け入れ時間の幅を拡大して安心して働ける環境を整えて頂きたい。 |
| 川村委員<br>（愛育学園はばたき） | 私からは，「社会的養護経験者の子育てに対する社会の理解促進について」という観点で述べさせていただきます。長文になってしまい，本当に申し訳ございません。<br><br>１　社会的養護経験者の子育て　～原家族資源の乏しさが子育てに与える影響～<br>（１）児童養護施設等の措置が18歳等で解除され，家庭復帰とならずに地域で暮らす若者（ここでいう「社会的養護経験者」）の多くは，生活技術，暮らしの知恵，経済力（貯金，収入，財産），原家族資源（物的・経済的・心理的支え。 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | つながり）など至る部分で大きな「ハンデ」を背負っているだろう。そのような若者が親となり子育てをしていくときには，「普通以上に」様々な困難があると想像できる。中でも，最も大きな困難だと私が考えるのは，原家族資源の乏しさが子育てに与える影響である。ここでの「原家族資源の乏しさ」とは，社会的養護経験者本人に親がいない，親がいてもつながりがない，親がいてもその支援・支えを受けられない，親から経済的搾取を受ける等の境遇にある状態である。<br>（２）子育てはパートナー両方の原家族の理解や協力が重要である。そのため，「原家族資源の乏しい社会的養護経験者」からすれば，こちらの原家族資源が乏しいことを相手はどう思うだろうか（理解されるだろうか），パートナーやその親からしたときに「原家族資源の乏しい社会的養護経験者がパートナー」であることはマイナスに映ってしまわないだろうか，といった交際・結婚・子育てに対する不安が生じ，心理的に苦しむことも考えられる。<br>（３）こうした心理的影響の他にも，原家族資源の乏しさが与える影響は様々考えられる。例えば，正しい子育ての知識・技術や暮らしの知恵などの継承がなされにくい，緊急時などに親に相談・頼ることができない，原家族からの経済的・物資的な援助を得られない，などである。相手パートナーとその原家族に理解があり，十分に協力してもらえるケースならばそれらの影響は小さくなるが，もしも理解や協力が得られにくい場合は大変な子育てになってしまう。社会的養護経験者本人には社会的養護を受けただけの背景や境遇があるため，最悪の場合は，虐待の連鎖や貧困の連鎖につながってしまう。パートナーの双方が社会的養護経験者である場合はさらにこれらの困難性が高まるといえる。<br>（４）前述（２）についてはなかなか解決しにくい側面があるものの，彼らに対する正しい子育ての知識・技術の継承，困った時の相談・頼り先の確保，経済的・物資的な支援といったサポートの充実については社会の力でどうにかできないだろうか。ひいては，彼らに対する心理的なケア（支え）にもなる「何か」ができないだろうか。知識や技術は後からでも身につけることができ，経済力は本人たちの努力や社会の現行制度があれば一定程度どうにかなるかもしれない。しかし，社会的養護経験者にとっての「原家族資源の乏しさ」はどうやっても変えることのできない，一生つきまとう事実である。それを本人やパートナーが受け入れ，向き合いながら，子育てをしていくことのできる仕組み，社会がこれからできていってほしい。<br><br>２　大分県に「社会的養護経験者の集い」のようなグループ（拠点）ができてほしい<br>（１）特有の「ハンデ」を背負う社会的養護経験者にとっては，似たような境遇で生きてきた仲間，すなわち他の社会 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | 的養護経験者の存在が大きな力になるのではないかと私は考える。子育て等に付随する社会的養護経験者の心理的不安，彼らが実際に子育てで困った経験，あるいは逆に役立ったこと等は，社会的養護経験者でない人にはほとんど想像しにくいものだろう。そういった意味では，「子育てを経験した人」以上に，「子育てを経験した（原家族資源の乏しい）社会的養護経験者」から話を聞くほうが，何よりも財産になる。<br>（２）そこで，大分県に「社会的養護経験者の集い」のようなグループ（拠点）ができてほしいと私は考えている。空想に近い考えのため私自身にこの具体性はまだないが，その「集い」が，社会的養護経験者（仲間）に対する正しい子育ての知識・技術の継承，困った時の相談・頼り先の確保，場合によっては経済的・物資的な支援といったサポート機能を果たす場になり，加え，心理的なケア（支え）にもなってほしい。仲間同士は本当の家族（「親族的家族」）ではないが，こうした仲間の存在が原家族資源の乏しさを補えるような「社会的家族」になってほしい。もしもこの「集い」が社会の力の一つとして機能していけば，前記の目的以外にも，例えば「措置解除後，連絡のつかない社会的養護経験者」の数を減らすなど，副次効果も期待できると信じている。 |
| 神田委員<br>（大分県保育連合会） | 少子化対策には「子育ても仕事もしやすい環境づくり」は必ず必要な事だと感じています。<br>当園では職場内結婚があり、女性職員の出産時、男性職員は育児休業を取得しました。里帰り出産を終え、乳児を連れての生活は多くの不安があると思ったからです。それから一年、女性職員は育休を終え時短勤務（正規職員）で復帰しました。子育てのしやすい職場は先ず職場の理解から始まると思います。男性も育児休業を取得することはあたりまえ、我が子が体調を崩したら休めるのが当たり前。昔の偏った苦労の「当たり前」から子育てしやすい職場環境の「当たり前」に変えるべきだと思います。<br>また、子どもの育ちには多くの人々の関わりが必要だと思います。多様な情報に誘惑されるためか、子育てを限られた範囲のみで行われる事が多くなったように感じます。地域の力は子どもの育ちにとって、とても重要な力になるのではないでしょうか。そして幼児期（保育所・認定こども園・幼稚園）で培った関係を子ども達の卒園後の成長に関わる事もこれからは必要になっていくように感じます。 |
| 久保委員<br>（別府大学短期大学部） | 保育園やこども園等では、園庭を開放したり、親子で参加することが出来るクラブ活動を開催したりするなど、様々な取り組みがあり、子育てに対する地域の理解促進は出来ていると考えます。ですが、職場の子育てに対する理解促進については、まだまだ課題があると考えました。小さな子どもは体調が悪くなりやすく、仕事を早退したり、 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | 休んだりしなければならない保護者は多いと思います。さらに、子どもの体調が悪くなる度に、職場に対して申し訳ない気持ちになる保護者もいると考えます。そのため、保護者の方が気軽に休みを取ることが出来るなど、子育てと仕事の両立がしやすくなるように、職場の子育てに対する理解の促進を促す必要があると考えました。 |
| 佐々木委員<br>（公募委員） | 「子育て満足度日本一になるためには」<br>株式会社パーソル総合研究所、東京大学・中原 淳准教授との共同研究の研究結果によると、残業時間に応じて、「幸福度」は徐々に低下しますが、月 60 時間を超えると反転して上昇することが明らかになりました。<br>これは、仕事の達成感などからくる認知のゆがみで「残業麻痺」となっている状況です。<br><br>月 60 時間を超える残業をすると幸福度は反転していますが、強いストレスを感じている人の割合は残業しない人の 1.6 倍、重篤な病気・疾患がある人は 1.9 倍と、高い健康リスクにさらされていることも判明しています。<br><br>そして残業時間と家族との交流時間の関係をみると、やはり残業が長いほど家族との交流時間が少なくなっている結果がでています。<br><br>子どもが活き活きと育つためには、家族とのふれあいの時間が大切です。<br>時間に追われイライラして責め立てるように宿題をさせても子どもは伸びないどころか、萎縮して親の顔色を伺うようになります。<br><br>大分県でもまだまだ長時間労働の職場が多数あると感じています。<br>大分県が子育て満足度日本一となるためには、企業の生産性を高めることによって、ワーク・ライフ・バランスを実現し、時間も気持ちもゆとりのある生活をおくる環境を整備する必要があると感じております。 |
| 佐藤委員<br>（公募委員） | ダブルケアラーの私が思ったこと<br>育児と介護の同時進行中の方々は、悩みが複雑でなかなか周りには相談もできず、一人で抱え込んでしまっています。悩みの内容的には、育児も介護も悩みはつきませんが、ダブルケアラーの相談相手として要介護者のケアマネージャー |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | や、地域包括支援センターの職員などが上位を占めているという調査結果が出ており、子育て支援者になかなか相談できない、もしくは相談しても支援に繋げてもらえない。と言うような現状がありました。<br>　ダブルケアラーの困り事を解決してくれるのが介護関係の方が多いので（その分、介護の悩み事）このような結果になりますが、当事者としては、子どもに色々な悩みを抱えていることが多く（発達が気になる。子どもの預け先がない等）そこの部分を、今後、地域の子育て支援員の皆様に是非気に掛けていただきたいです。<br><br>厚生労働省<br>　重層的支援体制整備事業が創設され、ダブルケアの払拭できない問題（複合的な問題、狭間のニーズ）が少しでも解決に繋がるのではないか？と、感じています。 |
| 首藤委員<br>（NPO 法人しげまさ子ども食堂） | 　スタッフが第２子出産を迎え、産後１ヶ月間の第１子の保育園のお迎えや預かりについて、自治体に相談したが解決策は見いだせなかった。関東の方から嫁いできた彼女は、帰省することもできず両親もこちらに来られず、身内のフォローがない中、自分からまわりにＳＯＳができませんでした。出産の数が減っていると聞きますが、そのサポート体制を相談しても親身になって実現まで考えてくれる“人”が必要だと感じています。 |
| 祖父江委員<br>（地域子育て支援拠点よいこのへや） | 【地域における課題】<br>・父親の育児休暇取得率が高まっても、気軽に利用しやすい子育て支援サービスが整っていなければ父親の孤育てが増えるのではないか。<br>・母親に比べ、父親同士が地域で繋がる場が不足している。<br>・平日疲弊している家庭にとって、休日に時間を割いてまで参加したくなるようなワクワクした子育て支援サービスが不足している。<br>・効率的な情報発信がなされていない。市・各拠点共に改善の余地が大いにあると感じる。<br>【職場理解における課題】<br>・若い女性が多い職場であれば、その人しか出来ない仕事を持つというリスクはあまり抱えないはず。誰かが欠けても回る組織作りがまだ不十分なのではないか。 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | 【よいこのへやにおける独自の取組み】<br>◆令和３年４月より、月１回日曜日を開所。（平日働く親たちが利用できるように）<br>・父親と子どもの利用が増えた。<br>・育休中に拠点を利用していた母親が、休日に遊びに来ることができると喜んでいる。<br>・日曜仕事で父親が不在の家庭にとって、助かるとの意見もある。<br>・「家庭力向上・家族同士や地域との繋がり」を目的とした開所であり、親子で楽しい時間を共有してもらうため、敢えて平日おこなっている一時預かり事業はやっていない。<br>◆プレママ期からの利用促進<br>・産婦人科に設置してもらうチラシ等の情報を充実させた。<br>（実際この情報を見て、妊娠期にベビーベッドの無料貸出を利用された方がいた。）<br>・毎月実施しているプレママデーにつき、妊婦への事前連絡と出産後の声掛けを一人一人丁寧に実施するようにしている。<br><br>現在、市報・イベントチラシ（月１回発行）・Facebook（活動報告）の情報発信ツールをもっと増やし、【圧倒的発信】をする必要があると考えています。<br>今月実施されている子育て支援員基本研修を、７３歳と６８歳のスタッフが２人受講しました。<br>【この期間中、好きな時間に、自分のペースで受講できるスタイル】は、最初はサポートが要りましたが、とても助かりました。ありがとうございます。 |
| 髙橋委員<br>（大分県助産師会） | 大分県助産師会は、「赤ちゃん＆おっぱい電話相談」事業をしており、妊娠期～子育て期の母乳育児・育児全般・妊娠・分娩・乳房管理・思春期・更年期・避妊等の電話相談を受けるようにしています。地域での助産師会員のネットワークもあり、ママからの訪問依頼があるときは、最寄りの助産師を紹介できます。また病院にいる助産師との連携もとられつつあります。ホームページも充実させ、最近はSNSも立ち上げ情報発信につとめています。<br>ただ病院出産が多くなり、そこにしか助産師がいないと思われているのが現状です。地域でママに寄り添える存在の助産師が多くいることを周知していきたいと思います。<br>また、職場での働き方改革で女性のデリケートな身体の悩みを解決し支えられる存在として専属の助産師がいてもよ |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | いのかなと思っています。 |
| 田中委員<br>（公募委員） | 大分県では、地域における子育て支援とライフ・ワーク・バランスの推進に関して、様々な取り組みがなされている。<br>しかし、それらの取り組みや支援が、肝心な子育て中の親に周知されていないことを感じる。<br>現在私は、1 歳の子の子育て中だが、地域子育て支援拠点『こどもルーム』の支援しか利用しておらず、他の支援については知らないものが多かった。<br>子育て中でもある私が今感じていることは、全てが初めての経験の中、子どもは日々成長していき、「これでいいのかな。」「これはどうしたらいいのだろうか。」と自問自答しながら不安な日々を送っている子育てママは多いのではないだろうかということである。<br>現在地域子育て支援サービスとして、数多くの支援が県より用意されている中、園庭の開放であったり、一時預かり、子育て支援センターなど、子どもの育ちを一緒に考える環境が用意されていることは、子育て中の親にとってとても大切なことであると感じている。<br>また、「協育」ネットワークを通じ、地域全体で子どもを育てるまちづくりも非常にいい取り組みだと感じているが、その中に私は、『保育士が考え・行う地域の子育て支援活動』が新たにあればいいなと考えている。<br>例えば、『親子で楽しめる子育てサークル』や『家族支援の一貫としての食育支援』など、保育士目線での地域子育て支援活動があれば面白いのではないだろうか。保育現場で様々な子どもや保護者・家庭を見てきた保育士だからこそ、保育現場だけでなく地域の人々と一緒に地域で子どもの育ちを創っていくことは可能だと思う。<br>職場の理解促進の面では、私は保育士が子育てをしながら現場復帰することは厳しいと感じている。小さい子を抱えて出産前と同じように働くことは、まだまだ厳しいものがあり、今まで積み上げてきたキャリアを断念せざる負えない保育士もいるのではないだろうか。<br>近年、子育てしやすい職場環境作りをしている企業も見られてきているが、保育現場はまだまだ子育てしやすい環境が用意されているとは感じない。保育業界でもより一層、ライフ・ワーク・バランスの取り組みがより進むことを願っている。 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| 冨髙委員<br>（大分県立看護科学大学） | 男性の育児休業取得率が低いことが課題であると考え、育児休業取得等職場全体における職員の育児への関心を高めることが必要であるのではないかと考えた。<br>そこで、大分県が実施している一般事業主行動計画を労働局へ届け出た企業を認証する、『おおいた子育て応援団』をさらに推し進めていくことが良いと考える。<br>企業が『おおいた子育て応援団』の認定を受けると、ホームページ等に認定を受けたことを記すことができたり、申請時に選択すれば大分県から働き方改革等に関する情報配信を受けることもできる。実際に企業情報をインターネットで調べたところホームページに記載し、働きやすい職場環境づくりに取り組んでいることをアピールしている企業もあった。<br>求職している若者は、職を選ぶ上で育児休業の取りやすさといった子どもを気にしてもらえる環境は重要視していると思う。私も結婚や出産はこれまでの生活が一変する大きな出来事だと考えている。若者にとって子どもに関心を向けてくれる企業は、安心して前向きな家族計画を立てるために必要なものであると考える。<br>企業側は『おおいた子育て応援団』のように県に認められたものを載せていると、求職している若者から、選ばれやすいのではないかと思う。また、この認定を受けるためや大々的にアピールするために、企業もより子育てに目を向けるようになり、職員のワークライフバランスをより良いものにすることができるのではないかと考えた。そのためにも、『おおいた子育て応援団』を広め、認定企業を増やし、活動を推進していくことが良いのではないかと考える。 |
| 姫野委員<br>（大分県民生委員児童委員協議会） | 地域の中で子育て家庭が孤立しないよう、地域の人達や親同士の関わりのきっかけと定着、広がりを目指して子育てサロンで居場所づくり、遊び場づくりに取り組んでいる。<br>地域の人達に、子育てサロンを周知してもらうための広報や参加への呼びかけを行っている。地域にはアパートやマンション等が多く、子育て家庭の存在をつかみにくい現状があるので、地区担当保健師さんと連携して子育てサロンへつながるようにしている。<br>日常の生活の中で、一人でも多くの人が周りの子育て家庭の存在に気づいているということが大事ではないかと思うが、つながりの希薄化が課題であると感じる。<br>地域コミュニティの活性化が子育て支援につながる。そのためには、人材育成と各関係機関の連携が大事はないかと思う。 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| 広津委員<br>（中津市小楠児童クラブ<br>ひまわり） | 県内児童クラブ数 386 クラブのうち運営委員会や保護者会が運営しているクラブは 259 クラブ（67.1%）、社会福祉法人運営 79 クラブ（20.5%）NPO 法人運営 22 クラブ（5.7%）<br><br>現在、小楠児童クラブは運営委員会委託・保護者会運営で行っている。<br>保護者役員は自身の仕事の合間に児童クラブ役員としての役割を果たしながら、家事育児、地域行事参加にと頑張っています。<br>2 年前より子どもにとって安全・安心で子育てしやすい環境作りのために法人化に向けて動いています。<br>地域の中で子育てをしていく上で、子どもの成長を場当たり的な対処ではない中期、長期的なスパンでみていくことが求められる。<br>そのために地域との連携は必要不可欠です。<br>学童保育がしっかりとした地盤のもとにあることは子ども達にとっても、その保護者にも必用必至なことです。 |
| 宮脇委員<br>（大分県社会福祉協議会） | 子育てに関する地域の取り組みに関わりたい、応援したいという個人の方や団体、企業の思いを、地域の取り組みにどのように結びつけていくか、地域の居場所づくりをはじめたいという方の思いをどのように形にしていくか試行錯誤しながら取り組んでいる。本年度は、随時の個別相談、集合型では月１回の立上げ相談会を設置するなど子ども食堂・地域の居場所づくりに関する理解促進に努めている。職場に関しては、子育てに限らず様々な職員にとって働きやすい柔軟な環境づくりが子育てに関する理解促進につながってくると思う。 |
| 幸野委員<br>（おおいたパパくらぶ） | 2022 年度より男性の育休制度が改正されますが、ある調査機関のアンケートでは経営者・役員クラスの 4 人に 1 人が男性の育休取得について「反対」している一方で、就活層、一般層、管理職の約 8 割は「賛成」との調査結果が。<br>一般職が「子育てをしたい」「育休を取得したい」と考えても、経営層の意識が変わらなければ、育休制度が変更されても取得率の上昇は期待できません。<br>子育て中の父親と話を家庭と仕事の両立について聞くと、「残業が少なく、休みも取りやすい雰囲気の職場なので、家族との時間が取れている。」と答える父親のほとんどが「会社や職場の同僚に感謝している。」と答えるのに対して、残業が多く子育てに理解がない職場に務めている父親は「家族との時間が取れずに悩んでいる。転職も考えたい。」と答える方がとても多い。 |

| 委　員　名 | ご 意 見 等 |
| --- | --- |
| | 子育てに理解ある職場を醸成することは、人材の流出を防ぐとともに優秀な人材を繋ぎ留め、確保することにも繋がるということを、経営層に理解させるような取り組みが必要でしょう。 |
| 吉田委員<br>（大分県社会的養育連絡協議会） | 地域の子育て支援としての児童館、放課後児童クラブを併設しています。コロナウイルス感染拡大がなかなか収束の兆しのない不安な中にあって、学校は休校、または分散登校となっています。その中でも、「児童館」「学童クラブ」は働く親たち、居場所が確保できない子どもたちのために開所するようにとの連絡がすぐに入りました。学校以上に「密」は避けられず不安を抱えながらの受け入れの日々を過ごしています。保育園、学童保育の待機児童をなくし、働く家庭を支える居場所づくりは進められてきています。これからの課題として感じているのが２点。<br><br>１）安心安全の最大限の確保（環境・人材など）。<br>２）子どもの育ちを考慮した充実した内容の見直し。<br><br>１）の課題に関しては、特にコロナ渦にある今は安心して利用してもらう家庭の立場、そして、受け入れる職員側の安心という両方の立場を見直していく必要があると思います。２）の課題に関しては、学校からそのまま放課後クラブを使用する子どもたちにとって、家庭にいる時間よりもウエイトを占めている居場所の提供だけではなく、今後は、長時間過ごすクラブでの内容の充実が求められているのではないかと思う。 |